

経済思想史(2013年度冬学期)講義案内

2013年10月4日
小野塚 知 二

A 講義の構成

- I 導 入 —課題と方法—
- II 前近代 —保護の体系—
 - 1 規範としての前近代
 - 2 伝統と富の規範
 - 3 市場の規範
- III 近世あるいは移行期 —二重性と対立—
 - 1 新しい取引形態と前近代的規範
 - 2 モラル・エコノミと絶対王政・重商主義
- IV 近 代 —自由の体系—
 - 1 自由と自動調節的市場観の確立
 - 2 自由の個人的根拠 —教育、「自助」、主知主義、「強く逞しい人間」—
 - 3 性と年齢をめぐる介入
- V 世紀転換期の新自由主義(New Liberalism)
 - 1 介入的自由主義の諸現象
 - 2 介入的自由主義の人間観 —「弱く劣った人間」—
- VI 現 代 —自由と保護—
 - 1 介入の制度化と異端の規律化
 - 2 大衆操作技術と「豊かさ」
 - 3 もう一つの新自由主義(Neo Liberalism)の登場
- VII 結 語 —現代の終焉—

B 講義の目的

本講義は過去の経済思想を跡付ける。ただし、編年的で網羅的な追跡には関心を向けない。淡々と過去の経済思想を論じて過不足なく論じ尽くせるのなら良いのだが、それは不可能である。第1に、一つの科目で過去の経済思想を論じ尽くすのは到底時間不足である。過去の人々の思想的営みはそれほど厚く、広い。第2により本質的なことだが、思想史も含めて歴史とは、現在の視点で過去を物語ることであり、いまを生きる人々に何かを発信しなければならない。以上の理由から、過去のすべてを記述しうる標準的歴史とは本質的にありえないものである。仮に歴史叙述に標準があるとするとするなら、それは何らかの関心を前提にしてある期間は成立するが、万古不易万人向けの標準はない。歴史を専門的に研究する者は過去についてできるだけ多くを知ろうとすべきだが、講義でそれを追求したなら無益だし有害ですらある。歴史の講義は、したがって、いまを生きる人々に役立つような何らかの主題を設定せざるをえない。

本講義は以下のような主題を設定する。すなわち、現在[=いま]、どのようにして現代[ほぼ20世紀に相当]が終わろうとしているのかを、経済思想に注目して明らかにする。19世紀の経済思想が自由の正当化で特徴付けられるとするなら、20世紀のそれは概括するなら、自由を維持しながらも保護・介入・規制・誘導を正当化してきた。こうした現代の経済思想がなぜ、いま終焉を迎えようとしながらも、綺麗に終わることができずにいるのか、これが本講義の設定する究極の問いである(この終焉のあとにいかなる経済思想が支配的になるのかという将来予測の問題は、科学の業^{わざ}ではなく、それ自体が価値判断を含む思想・宗教・運動・政策の、すなわち現在以降の人為に委ねられた問題なので、本講義では扱わないが、諸君は一個の人間として存分に考えるべきだと思う)。この問いに答えるためには、現代の経済思想が19世紀のそれとのいかなる対抗・緊張関係の中から生成したかを知らねばならず、19世紀に遡る必要があるが、この講義ではそれ以前の前近代と近世についても簡単に論及する。経済思想の選択肢は現代と19世紀の2種類に限定されてはいないことを知るには前近代や近世を見るのは有益だし、専門科目1の経済史との対応関係も前近代から見ておく方が万全になるからである。

現代の経済思想の終焉というテーマは、より具体的には少なくとも以下の二つの分けることができる。第1に、経済思想の歴史とは自由と保護の関係を調和させてきた歴史だが、どのような変化を経て、なぜ現代

の終焉に到達しつつあるのか。第2に、そうした変化の背後に、いかなる人間観と哲学的立場の変化が作用しているのか。

C 履修上の注意

1 教科書・参考文献について

本講義に教科書はない。参考文献はあるが(後日案内)、数冊読めば足りるような便利なものはない。その理由は講義中に詳述するが、簡単に言うなら、『経済思想史』を称する教科書・概説書はいずれも経済学思想史(経済学の思想的基盤や著名な経済学者の思想的特徴を歴史的に叙述したもの)であって、厳密な意味での経済思想史(現実の経済に反映し、またそこに表現された、生きられた思想の歴史的叙述)ではないからである。

なお、小野塚の最近書いたものから二つを紹介するので予め読んでおくことをお薦めする。

小野塚知二編著『自由と公共性 一介入的自由主義とその思想的起点一』日本経済評論社、2009年。
小野塚知二「日本の社会政策の目的合理性と人間観 一政策思想史の視点から一」『社会政策』第3巻第1号、2011年6月、pp. 28-40.

2 単位取得の条件

教科書がないので、本講義では通常の講義以上に、①毎回出席し、②講義内容を理解し、③それを自分のノートに整理し、④参考文献等を用いて自習することが単位取得の必須条件となる。出席は強要しないが、「出席しなくても単位(あるいは、良好な成績)がえられる」ことを意味するわけではない。試験答案を見れば、諸君が何をしてきたか 一ノートを取りながら注意深く聴き講義内容を正確に理解していたか、あるいは出席はしたが板書を書き写す他はろくにノートをとらずに漫然と聴いていたか、それともほとんど出席せずに他人のノートを借りただけか、また講義時間以外にさまざまな文献を用いて自習したか等々 一はほとんど一目瞭然にわかる。少なくとも成績を評価するのに十分な程度にはわかるし、諸君が何をしてきたのかわかるような問題を出す。

毎回、出欠席をチェックして一人前の人格の諸君に出席を強要するような無用なことはしない。自律を期待する。欠席の連絡は事前にも事後にも必要ない。ただし、やむをえない事情で長期間欠席する場合は連絡していただければ、何らかの助言や指示を与えることができよう。

3 成績評価

成績は原則として学期末の試験で評価する。試験のやり方はまだ決めていないが、おそらく、複数出題した内の何問か選択ということになるであろう。なお、提出任意・テーマ自由(むろん、この講義の内容に関わる限りで)のレポートで所定の条件を満たしたものを提出した場合、一つにつき概ね0~10点の範囲で加点する。レポートについては後日配布する別紙で案内する。

4 質問と相談

質問は講義中随時受け付けるが、わたしの言い誤り、書き間違いなど時間をとらずに簡潔に答えられることなどに限っていただきたい。その他の質問や相談は講義終了後受け付ける。ただし、講義後に切迫した用事があるときは失礼することもありうるので、以下の方法を用意しておく。

(1)私の研究室(910)を訪ねていただくのが、文献等もその場で案内できるので最適な方法である。他に用事がない限り毎日来ているが、講義、会議、その他の用務で研究室にいないことが多く、また研究室にいても多用で対応できないこともあるので、e-mail(onozukat@e.u-tokyo.ac.jp)で事前に連絡して日時を決めておいた方が確実である。

(2)質問・相談はe-mailでも受け付けるが、じかに会うのと違って何度かメールのやりとりをしないと埒のあかないこともしばしばなので、決して手軽な方法ではない。

(3)質問されたことで、受講者全員が知っていた方が良さそうな重要なことがあれば、ホームページ(http://www.onozukat.e.u-tokyo.ac.jp/educational_j.html)上にQ&Aを載せるであろう。

5 講義評価

2回ほど講義評価をしていただく予定である。内容面までの確に評価できるように講義に臨んでほしい。